



## 農業土木を 支えてきた人々

### 明正井路と矢島義一

川野宏平\*

#### I. 初老の婦人

年の瀬も押し迫った昭和61年12月のある日、私たちはその婦人に会った。抑えぎみのひかえめな色の和服を軽く着こなした、筒状に巻いた風呂敷包みを持って彼女は現れた。髪には幾分白いものがまじっているが、柔らかい身のこなしや落ちつきのある話しぶりからは、すでに還暦をすぎているとは思えない若々しさと温かいものが感じられた。

婦人の名は矢島智恵。

明正井路の開削に自らの身命を捧げた故矢島義一のご息女である。

私たちはこれから、この初老の婦人とともに亡き矢島義一の回想にふけろうとしているのである。

矢島義一——彼の名を、明正井路の歴史を語るとき、忘れることはできない。彼の功績が今なお語り継がれているのは、その苦闘の中でなした偉業とともに非業の死によるところが大きい。

大分県大野郡緒方町大字平石。この明正井路土地改良区の事務所前に行くと、彼の功績を賛える石碑が立っている。忘れ去られたようにして、訪れる人も少ないが、そこに立つと矢島義一の声が聞こえてくるような気がする。

すなわち、『速やかに疎水を荒平溜池に流したし』と——。

#### II. 水がほしい

明正井路のある大野郡緒方町は、大分県の西南方、大野川の中流域にある。今でこそ豊富な水と拓けゆく圃場整備などにより大分県農業の一翼を担う地域となりつつあるが、その昔、この地域は水も無く大地は荒れ果てたまま、人々は苦勞の連続であった。交通の便も悪く、水を汲むにも山の上から谷川まで1日に何往復もしなけ

ればならないというように、住民の苦勞は困憊の度を深めていた。

明正井路の歴史は、そんな背景のもと、今から約125年前、江戸時代の末期文久年間から始まる。「田畑がほしい。水がほしい。」と窮乏を訴える領民の声を憂えた時の岡藩主は、水利と開墾をはじめとする勸農富致の政策を起こした。まず、地形のよい所を選んで開墾を始める。それとともに水源を求め、灌漑を行うことを考えた。水源を直入郡白水の瀑布下に求め南緒方村大字新字荒平溜池にまで導水しようとしたのである。しかし、領民と藩財政の窮乏により計画は遅々として進まず、最初の計画は努力の甲斐もなく水泡と帰ってしまった。

その後、何度となく水源の開拓に志したが、財政難のため思うように進まず、計画は実現できなかった。領民の水を欲する気持はつる一方、時は流れ、明治維新の嵐の中で廃藩置県を迎えていった。

維新後、町村制が実施されると南緒方村の村吏や有志たちが集まり、直入郡入田村笹の尾、大津留の水源から水を引いて荒平溜池に導水する計画をたてた。しかし、明治27年(1894)計画に着手しようとした矢先、日清戦争が勃発、またもや計画は中止せざるを得なくなった。その後、明治30年に至りやつの思いで調査に着手したが、明治34年になると財界不況ということで気運は盛り上がったまま一時中止を余儀なくされてしまった。

明治37年(1904)日露戦争勃発、計画はいよいよ暗礁に乗り上げるかと思えた。しかし、何が幸いするかわからないもので、逆に企業熱が高まり、計画の遂行を急ぐべきだという論議が盛んになってきたのである。こうして明治40年冬、遂に測量に着手することができ、翌年の春、待望の概略測量を終えることができたのであった。

#### III. 会津武士

矢島義一が、大分県の農業技手として赴任してきたのはそんなころであった。

\* 前・大分県農政部耕地課(かわの こうへい)

義一は、明治17年(1884)1月、福島県伊達郡小田村大字大波に生まれる。旧姓を高橋と称し、明治37年(1904)東京市立工事学校土木科を卒業すると、同40年農商務省委託耕地整理講習所に入所、翌41年大分県に赴任して行く。

このころ、九州には福島県生まれの者がかなりいたらしい。というのは、明治10年(1877)、時の維新政府に反対して西郷隆盛が起こした西南戦争によるところが大きい。政府軍として薩摩軍と戦った勇士の中に、福島県出身の者が多数まじっていたからである。いわゆる、「会津武士」である。後に義一が入籍し矢島義一となる「矢島家」もまた会津武士の子孫であった。義一は、「会津武士」としての誇りと気概をもって、明正井路の開削に没頭していくことになる。

明治42年(1909)6月、緒方川流域一帯において、耕地整理組合法に基づく補助を受け、水路開削のための本格的な調査が開始された。義一はこの調査に主任として当たることになった。水源を直入郡入田村(現竹田市出合)に定め、幹支線合せて116 km、2,300 haに及ぶ大事業の実施測量設計に着手したのである。

#### IV. 金がない

調査はまず、図面作りから始めなければならなかったが、測量機械等も不備なため、その作業は今から考えれば気の遠くなるような作業であった。そうしたなかで、1,000 haを越す全ての計画、全ての図面が完成すると、次はいよいよ水路の測量である。松杭を使って地盤杭、No. 杭を打込んでいくのであるが、地形が悪く杭の固定に苦心する。距離は20間(約36 m)の竹尺で測るが、立木や雑草が邪魔してなかなか進まなかった。

義一は部下の技術員を励ましつつほとんど不眠不休の連続であった。その甲斐あって大正元年(1912)12月、調査は完了した。そのまま同3年3月、明正耕地整理組合設立の許可を受けると、同6年11月遂に積年の夢であった水路開削に着手した。

義一の現場主任としての本格的な活動がいよいよ始まった。義一のもとで働き今も健在なある人は、そのころの義一のことを次のように言う。「鼻の下に髭をたくわえておりいつも気むずかしい顔をしていた。どこか近寄りたがたい威厳があり、なかなか声もかけにくかった。しかし、近所の青年団にわらじを作らせてそれを買上げたりして面倒見が非常によかった」と――。

工事に着手したものの、その進捗は思うにまかせなかった。大正3年(1914)から始まった第一次世界大戦の影響で諸物価が高騰し、事業費がうなぎのぼりにハ

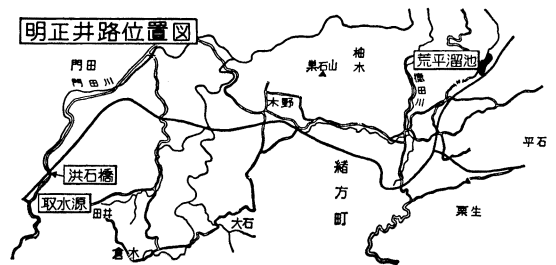


図-1 明正井路

ネ上がったのである。

金がない! 義一をはじめ関係者が終始辛苦をなめたのは、この資金の調達であった。着工当初32万5,000円の事業費も、大正8年(1919)8月には早くも一挙に71万4,800円にまでハネ上がり、大幅な変更増をせざるを得なくなった。日本勧業銀行への借入れ要請も、増加分の出資方法が不明確だと断われ、積年の夢も着手からわずか3年足らずで工事の一時中止を余儀なくされてしまった。資金調達に奔走し組合を双肩に担った義一の苦闘の日々が続いた。酒におぼれる日もあった。もらった給料が全て酒代に代わってしまうことも度々だった。幸い翌大正10年(1921)4月、低利資金15万円の借入れをすることができ再び工事に着手することができたが、残りの資金については依然目途が立たず、遂に少額の地方債を起し辛じて工事を続けることとなった。しかし、大正11年9月、再び事業費を103万円に増額せざるを得なくなり、またしても工事を一時中止することになった。

このようにして、数度の一時中止、続行を繰返しながら終始資金難に悩まされた結果、工事を資金本位に調節せざるを得なくなった。そのため請負者との間に物議をかもすことも度々で、部分的な分割発注が増え工事は遅々として進まなくなった。

また、地形が悪く、幹線水路の開削工事は大部分がトンネル掘削のため負傷者が続出し、死者3名、両眼失明、両腕損失者1名などが出た。

義一は、八方に手を尽くし、諸般の事務指導に全力を傾注し事態の好転するのを、ただひたすらに待った。

#### V. 乃木大将

矢島義一は少なからず軍人氣質をもっていたものと思われる。一言で軍人氣質といっても難しいが、仕事に対して忠実で非常に責任感が強く、剛毅な中にも頑強さを合せ持つ英邁な性格であったろうと思われる。

「父は、よく乃木大将を尊敬していると口ぐせのように言っていたそうです」と、智恵は語る。あの203高地を数度にわたる戦闘の末、遂に落とした乃木希典であ

る。彼もまた仕事に忠実であり、仕事に生き仕事に死んだ人である。どこか似ているような気がする。

義一は大酒飲みである。しかし、大酒は飲むが決して飲まれることなく、深憂に耐えられないようなときにも苦渋に満ちた顔のどこかで、猪口を片手に次の策を練っていたのではなからうか。こんな義一は、家族にとってはどんな夫、どんな父であったのだろうか。ここにひとつのエピソードがある。

そのころ、義一は家族と離れて、今でいう単身赴任を続けていた。家族を大分市に残し、一人で緒方村に借家住まいをしていたのである。週末に久しぶりに帰ってくると、まず玄関の上り框にドッカと腰をおろし、出されたたらいで足を洗う。それからゆっくりと夕食の膳につく。久しぶりの父に子供たちはうれしさを隠しきれないが、義一は一向に表情を変えない。酒を待っているのである。やがて、出された酒が臍にしみわたり、やっとのことで人心地がつくと、おもむろに風呂敷包みを解き始める。それから初めて土産の羊羹を出すのである。大酒飲みの義一にとって酒が疲れを癒す何よりの薬であったのだろうが、また直ぐに土産を出さないところは、久しぶりの妻や子に対する多少の照れがあったのかもしれない。

またこんなこともあった。義一の留守中に、来訪者が菓子折りを置いたいったが、それにひどく腹をたて、夜中にもかかわらず妻に返しに行かせたのである。非常に潔癖な性格でもあったのだろう。

また、子供ですらも近づきたい厳しさがあつた義一も、娘の智恵だけは現場に連れて行って、そばに置いて仕事をしたいともらしたことがあるそうだ。四六時中仕事のことが頭から離れず、家族のことなどこれっぽっちも考えていないような義一の人間味をかいま見る挿話である。



写真-1 洪石橋（六連の水路橋）

義一の人となりを示す話はまだまだたくさんあるが、それらは全て義一の仕事へ対する情熱、仕事への責任感を表すものばかりである。家に帰っても仕事のことは気にしていたが、家のことは何ひとつ尋ねなかったという。仕事に殉職した乃木大将への尊敬の念がうかがい知れるところである。

## VI. 「速やかに疎水を荒平溜池に流したし」

大正13年（1924）6月、遂に明正井路は工事費の高騰による資金不足、トンネル部の難工事等を克服し6年半にわたる歳月を経て完成した。親、子、孫3代にわたって見続けた夢が実現したのである。しかし、……

話をこの時より2年ほど前にもどさなければならない。

事業費の高騰や死傷者続出の中、矢島義一の苦闘の日々は続いていた。責任感が人一倍強い義一は、資金の調達に奔走する一方、少ない予算のため工事が雑になることを一番おそれた。技術者としての誇りが妥協を許さなかったのである。現場監督に当たる義一の異常とも思える日々が続いた。心身とも酷使に次ぐ酷使の連続であった。こんな義一の姿を見て、ある時、彼の妻は義一に内勤（県庁勤め）を勧めたことがある。しかし、義一は頑としてきかなかつた。このころから、義一の中で明正井路開削に身命を賭す覚悟ができ上がっていたのかもしれない。

やがて過労と栄養失調のためか、義一の体に異変が起こりはじめた。視力が著しく低下し始めたのである。「底翳（そこひ）」である。さらに視力の低下とともに、気分が鬱屈する日が多くなってきた。井路開削もやっとのことでようやく軌道に乗り始めたころのことである。

そんなある日、義一は久しぶりに家族のいるわが家で



写真-2 矢島義一の墓

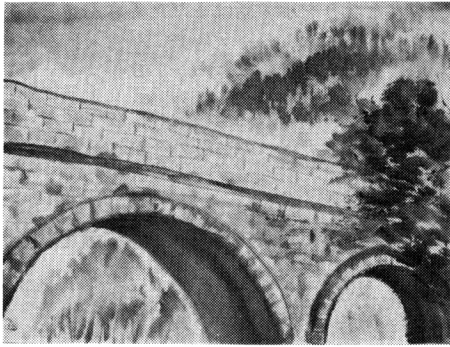


写真-3 矢島智恵の筆になる洪石橋



写真-4 矢島智恵の筆になる荒平溜池

過ごしていた。秋晴れのさわやかな一日であった。小学1年の長男とかぞえ三つになる長女とが庭で遊んでいる。見るともなしに見ていた義一は、ふと気づくと二人を呼び、手に50銭を握らせて言った。

「天気がいいし、上野の山にナバ(きのこ)取りにでも行っておいで。しばらく一人にしといてももらえないか」

このときのことを、智恵は今でも鮮明に覚えているという。義一が不帰の人となったのは、それから一週間後のことである。

大正11年(1922)10月30日、矢島義一は突如自刃したのである。いや突如というより既に覚悟はできていたのかもしれない。事業の前途によりやく曙光が射しはじめたこのとき、自分の体の限界を知り覚悟を決めていたのかもしれない。臨終に際し「速やかに疎水を荒平溜池に流したし」とのみで、他を語らなかったことをみても、最初から身命を賭し、その前途の曙光の中で自分の天命の終わりを感じとっていたのかもしれない。

明治42年、義一が明正井路の開削に携わってから14年後のこと、享年わずか38歳の若さであった。

## VII. 水墨画

明正井路は、現在組合員数600名余りの土地改良区である。その支配する面積は700ha、総水路延長は120kmに及んでいる。義一の死後、幾度かの改修を重ね現在では近代的な水利施設が完備し、水に乏しかった枯れ池も潤沢な水の恩恵に浴している。

昭和61年夏、矢島智恵は、父の残した数々の思い出を捜しながら緒方川流域を歩いた。6連の水路橋(洪石橋)荒平の溜池……。どれもこれも、何処かに父の汗と苦闘の歴史がしみついているものばかりである。懐かしさとともに胸にこみあげてくるものがあつた。

「私は30年間教員をしてきたが、何も(形あるものは)残らなかった。今、改めて父は偉いなしみじみ思います。」と、智恵は語る。

智恵は、携えてきた丸い風呂敷包みを、少しはにかみながら私たちの前にひろげた。中から出てきたのは2枚の水墨画であった。

「3年前からこんなものを始めたんですよ。私も何か残せるものがあつたらと思って——」

2枚の水墨画には、荒平溜池と洪石橋が描かれてあつた。娘の父への思い入れが伝わってくる。

義一は大酒ばかり喰らって、給料はというと酒代に化けてしまうため、家族の生活はつましいものだった。

「母は本当に苦勞したと思います」と智恵が語る。

こんな義一でも、子供たちのことになると、『学問をさせるならとことんさせる。しないのなら豊職人でも何でもよい。生半可なことだけは絶対にさせるな』と、よく言っていたそうである。子供たちへの愛情が満ち溢れている言葉である。

いま、矢島義一は生まれ故郷の会津の地で眠っている。死後、妻とともに会津に帰り、そこに建墓したものである。

生まれ故郷を離れ、はるか九州の地でその人生の大半を過ごし、明正井路の開削のために全てを捧げた義一の気持はどんなものであつたろう。だれもはかり知ることはできない。しかし、娘智恵が言うように、後世に形あるものを残し、その偉業がある限り、そこには確かに義一の志は生き続けている。

この2枚の水墨画にもあるように——。

(文中敬称略)

[1987. 3. 23. 受稿]